

## 陳述書（名城氏の証言に対する反論）

平成25年4月17日

屋比久吉広

私は2003年ごろから上原正稔さんの連絡係と原稿入力に協力しています。

2008年8月14日木曜日に179回の原稿を名城さんにメールし、30分ほどで原稿の返送と180回が最終回になるかメールがありました。

私は全容については知らされてなく、メールも夕方に届き、自分の仕事もあったので、その日は上原さんに連絡はしませんでした。

翌15日金曜日、上原さんから180回の原稿を受け取り、あと何回で終わりなのかを聞いて、15時半ごろにメールで原稿及び質問の回答（あと2回で終了する）をメールし、10分後くらいに返送と修正箇所の指摘のメールを受け取りました。

ここまでは名城さんの証言で私が関与している部分は私の記憶と同様です。

18日月曜日の午前中だったと思いますが、名城さんより180回の原稿を書き直して欲しいという依頼が電話であり、上原さんにその旨を伝えたところ、上原さんは少し怒っていましたが、渋々書き直しました。その原稿を15時半頃に名城さんに送信し、30分後くらいに返送メールが届きました。

19日火曜日は朝8時くらいから、マクドナルドひめゆり通り店で上原さんと会い、その場で原稿を入力し昼前に最終181回の原稿を名城さんにメールしました。しばらくその店で雑談をして、その後、上原さんと世間話をしながら上原さんの自宅に徒歩で向かいました。すると上原さんの自宅前で私の携帯に名城さんから電話がありました。上原さんに連絡して欲しいということだったので、すぐに傍にいた上原さんと代わりました。上原さんは何かを聞かされたようで、激怒しながら電話で話をしていました。携帯なので相手の声は聞こえないのですが、上原さんは原稿を絶対に書き換えないとっていました。私は前回のこともあるのでおそらく書き換えを要求されたのだろうと察しました。上原さんが押し問答をやっている中で、「集団自決は軍命がないのだから新報は載せるべきだ」とか「これを載せなければ新報は恥をかく」とかいうようなことをしていました。上原さんは一貫して書き換えないとっていました。そのうち電話が終わりました。私は上原さんの意思が固そうだったので、前回の180回は上原さんが折れたから、今度は琉球新報が折れるものだと思っていました。その後は名城さんから上原さんに対し連載についてのメー

ルや電話連絡はありませんでした。唯一、名城さんから連絡があったのは上原さんの連載を見て連絡を取りたいという人がいるのでその人の電話番号を教えてもらったくらいです。

名城さんの証言調書の6頁には、名城さんが、私に対し、180回で上原さんの連載を終了するから上原さんの方から直接電話をして欲しい旨の連絡をしたと証言したことが記載されていますが、私は19日に上原さんと別れた後は名城さんから連絡があったという記憶はありませんし、またそのようなメールも受け取っていません。そして、181回の原稿が翌日の新聞に掲載されるかどうかは、電話のやり取りを聞いていて微妙だと感じていましたが、はっきりと連載180回で終了するというような認識はありませんでした。

また、名城さんは、私に対するその後の連絡について、「その後、多分1回や2回はやったと思います」と証言していますが、これは私の認識と異なっています。私はできることなら上原さんと琉球新報の関係が悪化しないように願っていました。私にその後連絡をしたというのなら、私は上原さんに対し、目の前で私の携帯から名城さんに連絡くらいはします。というのも、当時の上原さんは電話がなく、上原さんへの電話連絡は私が仲介していたからです。しかし、名城さんから掲載しないという電話連絡は全くありませんでした。

名城さんとはメールが主体のやり取りでしたが、最終回の原稿を掲載しないという重要なことを電話連絡が取れないということだけで上原さんに理由も伝えずに済んでしまったことになっていたのには驚きました。私は琉球新報を購読していませんので、最終回が掲載されなかったことを上原さんから数日後に聞き、ビックリしたと同時にガッカリしました。そして、連載を楽しみにしていた読者が最終回を読むことができなかったことは残念に思いました。上原さんが裁判を起こすまで琉球新報が最終回の原稿を掲載しなかった理由を上原さんに何ら説明していなかったことにも沖縄を代表している新聞社としての品位を疑わざるを得ないです。

上原さんが名城さんから最終回を書き直すよう電話で押し問答している時に上原さんから出た言葉が今、現実には起きているわけで、驚いています。

以上